初期万葉論

白川　静

中央公論

初期万葉論

白川　静

中央公論社

初期万葉論　©1979　定価 980円
昭和54年4月15日印刷　昭和54年4月25日発行　検印廃止
著者　白川 静　発行者　高梨 茂　印刷所　三晃印刷

発行所　中央公論社　東京都中央区京橋2丁目8番7号 振替東京2—34

初期万葉論　目次

第一章　比較文学の方法
一 古代歌謡の時代　二 発想と表現　三 人麻呂の位置　7

第二章　巻頭の歌
一 巻頭歌の問題　二 草摘み歌の展開　三 巻頭歌の条件　33

第三章　呪歌の伝統
一 安騎野の冬猟　二 遊猟と招魂　三 天皇霊の継承　四 安騎野冬猟歌の解釈　69

第四章　叙景歌の成立
一 吉野讃歌　二 山川の祭祀　三 見れど飽かぬ　四 人麻呂と赤人　五 叙景歌の成立　113

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第五章　挽歌の系譜　179
一　最初の作歌者　二　天智挽歌　三　挽歌と相聞
四　短歌の展開
第六章　万葉の軌跡　225
一　白鳳と天平の間　二『人麻呂歌集』について
三　依羅と丹比　四　万葉歌の展開
あとがき　261

初期万葉論

第一章　比較文学の方法

一　古代歌謡の時代

比較文学的な研究には、その目的とするところに従って種々の方法がありうるであろう。たとえば万葉集は、わが国の古代における文学の出発をなす記念すべき歌集であるという意味において、他の民族のもつ古代詞華集と比較すべき問題をもつであろう。いずれの文化民族も、その古代における原体験というべきものを、古代詞華集として結集し、そこに民族精神の回帰点を求めている。宗教的な体験を基調とするところには、『聖書』の「詩篇」や『リグ・ヴェーダ』が生まれるであろうし、英雄時代のうちに人間の運命を考えようとするものには、その物語を歌う長篇の叙事詩が伝えられるであろう。しかし中国の『詩経』は、同じく古代詞華集であるが、そこには一貫したテーマとすべきものはない。それは各地域の、また異なる立場における生活者の歌謡を含むものとして、万葉集と最も近い性質をもつものである。

『詩経』は、風（ふう）とよばれる十五の地域にわたる民謡、小雅大雅とよばれる西周期貴族社会の儀礼詩、そして王室の廟歌である頌と、合わせて三百五篇より成る。そこには各地の村落の、また西

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

周貴族の生活が、その現実のままに歌われている。わが国の万葉集も、その歌集としての性格は『詩経』のそれに近い。それで比較文学的研究の対象としては、同じく古代歌謡とよばれるこれら各民族の古典のなかでも、『詩経』が最も比較すべき共通の問題点をもつはずである。もとより『詩経』は前九世紀をその中心年代とし、万葉は八世紀前半を中心とするものであるから、その絶対年代は千数百年を隔てており、また『詩経』は作者をもつことのない歌謡集であるが、万葉にはすでに多くの作者があり、その家集すらもあるという、かなり重要な相違がある。しかしそれにもかかわらず、この両者の間に比較文学的な研究が可能であるとするのは、そのような古代詞華集の成立する歴史的条件において共通するところがあり、またしたがってその文学の性格において共通するものがあると考えられるからである。

古代歌謡の時代は、古代のある特定の時期にあらわれているようである。人びとが自己のおかれている社会的な立場を自覚し、それを歌においてあらわすということは、強固な閉塞的な社会のなかでは考えがたいことであった。共同体的な秩序のなかに生活する人びとは、その秩序の営みである季節的な、また儀礼的な行事において、その歌謡の場に参加するのみで、そのとき即興的に替え歌を作り問答歌を歌うことはあるとしても、共同体の秩序をこえて自己表現的な欲求をあらわすことはなかったであろう。しかしその共同体の秩序が不安定なものとなり、生への不安が高まるにつれて、人びとは自らの歌を欲するようになる。

貴族社会の詩である二雅においても、事情は同じである。二雅の詩篇のうち古い時期のものは、貴族社会が成立し繁栄した時代、おそらくは共王から孝夷期にわたる、前十世紀後半のころのものであろう。官職の世襲、祖先の祭祀がその秩序の中心であった。したがって詩篇は祭事詩、儀礼詩、饗宴詩系列のものが行なわれている。しかしやがて大土地所有の進展に伴って豪族勢力が形成されると、古い氏族貴族は没落し、豪族のうちには王室を擁して専権を恣にするものもあらわれる。九世紀前半の夷厲期が、その衰乱の時代であったと思われる。その時期には多くの社会詩、政治詩というべき長篇の詩が作られている。それは憶良の作品などにくらべても、きびしく現実的なものであった。かれらは政治的発言をも、あえて辞することはなかった。小雅「巷伯」七章の末章には「寺人孟子(王の近侍の人の名)　此の詩を作爲す　凡百の君子　敬しんでこれを聽け」と作者自らが名をあらわして歌い、また大雅「民労」は民生の多艱を救うべきことを訴えた長篇であるが、「王、女(なんぢ)を玉にせむと欲す　是(ここ)を用(もつ)て大いに諫む」と王に直言する語をもって結んでいる。

中国の古代にこのような詩篇を生んだ歴史的条件とは、古代的な共同体の崩壊が、この時期において決定的なものとなったということである。西周の王畿では、王室をめぐる多くの氏族貴族が生まれ、土地経営の発展とともに豪族専制の時代を迎える。この事態に対して、王権の回復を望む直言が出されるのは、旧体制派のものであろう。二雅の詩篇はその社会的変動のなかで生まれるが、古い氏族たちの多くは、その変動のなかで没落していった。

祈父（師長）よ　予は王の爪牙（近衛）なるに　なんすれぞ恤に轉ぜしめて　止居（生活）するところなからしむる　（第一章）

という小雅「祈父」の一篇は、かつて王の親衛であったいわば旗本衆の没落を歎く詩である。

東方列国の内部にもその支配層としての氏族貴族が形成され、古代的氏族共同体は次第に解体されつつあった。国風の詩篇には、周南や召南、豳風など、比較的古い時代の祭祀共同体的な秩序を歌うものも、地域によってなおいくらか残されているが、大部分の詩は歌垣の歌か民謡、ときには領主地主に対して怨嗟の声を放つ社会詩、生活詩である。これらもまた万葉の東歌や防人歌と異なってはげしく抵抗的であり、ときには逃亡流離の詩もみられるのである。

『詩経』の諸篇が、その貴族社会の詩においても、また国風の民謡においても、古代社会の急激な変貌の時期に生まれているという事実は、古代歌謡を生む歴史的条件が、まさにそのような社会的激動の時期であったことを示すものであろう。その激動のうちにこのような歌謡群を生むエネルギーが発生するのである。そしてそれはまた、万葉の時代についてもそのまま適用しうることである。大化に発する国家の体制化の動きは、近江令、大宝令につづいて養老令の施行となり、ここに律令的国家体制が完成されるが、わが国の古代社会はこのときはじめて脱皮の苦悩を経験する。この時期がいわゆる万葉前期、文化史・美術史の上では白鳳期とよばれるものである。それはまさに万葉の様式が成立し、またその様式がアルカイックな美と精神とを示した時期である。

詩篇と万葉を生む歴史的条件が、その絶対的年代の隔絶ということを超えて、その歴史的時期の性格における同一性にあったとするならば、それはまたその文学の成立に、あるいはその文学の古代的性格において、近似性をもつものであったはずである。具体的にいえば、その古代的な自然観は、当然にその発想と表現とを規定したであろうし、その文学はそのようなものとして機能する社会的場所をもったであろう。独詠的な自己表白的な文学は、このアルカイックの時代には、まだあらわれていなかったはずである。古い氏族制的共同体はすでにその機能を失っていたとしても、自我の自覚を生み出す基盤はまだ成熟していない。その自覚への苦悩は、万葉においてはその後期、天平の歌人たちによって歌われる。白鳳と天平とは、精神史の上からも異なる世界であった。

二　発想と表現

前期万葉の時代は、なお古代的な自然観の支配する時期であり、人びとの意識は自然と融即的な関係のうちにあった。自然に対する態度や行為によって、自然との交渉をよび起こし、霊的に機能させることが可能であると考えられていたのである。そこに古代歌謡の発想と表現の問題がある。詩篇におけるそのような発想法は「興（きょう）」とよばれる。興とはよび興（おこ）すことを意味する語で、その字形は酒器を倒にして地霊に酒をふりそそいでいる形である。字形中の同は、卣（ゆう）とよばれる

神酒の器を倒にしたものである。

自然との交渉の最も直接的な方法は、それを対象として「見る」ことであった。前期万葉の歌に多くみられる「見る」は、まさにそのような意味をもつ行為である。前期の作者人麻呂の歌のなかでも、比較的確かなものは「人麻呂作歌」とされているものであるから、例歌としてはいまその作品のみを用いることにしよう。「人麻呂作歌」の大部分は、挽歌と羈旅の歌である。巻三に「羈旅歌八首」がある。

稲日野も行き過ぎかてに思へれば心戀ほしき可古の島見ゆ　（巻三、二五三）

ともし火の明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見ず　（同、二五四）

天離る夷の長道ゆ戀ひ來れば明石の門より大和島見ゆ　（同、二五五）

稲日野は、天智の三山歌（巻一、一三～五）にみえる印南野、印南国原であろう。この妻争いの伝承の地を過ぎるとき、表敬の礼を失してはならぬと考えられていた。「行き過ぎかてに思」うことがその地霊への挨拶であり、「心戀ほし」く思うことが表敬の礼であり、その「可古の島見ゆ」が地霊讃頌の意をもつ表現である。したがって第二首の「漕ぎ別れなむ家のあたり見ず」というのは、その視界を去ることを歌うことによって、故郷との直接的な霊の連なりの断絶を、不安とする意が示される。そのような不安の表白も、思慕の心を表現する一つの形式である。第三句は「入る日にか」とよまれていることも多いが、久松潜一氏の『万葉秀歌』に「漂泊の思いも、入らむ日やと訓する方がよく現われる」とあるように、それは漂泊の思いをこめたものである。

「家のあたり」といっても、その地域への眺望を含む。空ゆく雲であっても、たたなわる山なみであってもよい。それで「明石の門より大和島見ゆ」という表現も可能である。「見る」ことによって、保護霊のあるその地との接触は、すでに行なわれているのである。三首いずれも、ただの叙景の歌でなく、叙景的意識をもつものではない。

「見る」ことの呪歌的性格は、「見れど飽かぬ」という表現によっていっそう強められる。人麻呂には吉野の長歌が二首（巻一、三六、三八）あるが、それぞれの反歌に

見れど飽かぬ吉野の河の常滑（とこなめ）の絶ゆることなくまた還り見む（巻一、三七）

山川も依りて仕ふる神ながらたぎつ河内に船出せすかも（同、三九）

と歌う。「見れど飽かぬ」、また「絶ゆることなくまた還り見む」と、ひたすらに「見る」という行為に表現を集中しているのは、その「たぎつ河内」が、「山川も依りて仕ふる神ながら」なる聖地であり、そこは持統が年に数回もその天皇霊を祓い清めるために赴いて、神事を行なう場所であったからである。ここにも叙景的意識は全くない。赤人の吉野歌も、その意味で叙景歌ではない。もし叙景的要素があるとすれば、それは聖地讃頌のためのものにすぎない。

近江荒都を過ぎるときの人麻呂作歌も、その自然に対する態度は、これらの歌の延長線上にあるものと考えられる。

ささなみの志賀の辛埼（からさき）幸くあれど大宮人の船待ちかねつ（巻一、三〇）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com